

## お客様精神の厄く学ぶ姿勢



から意見交換まで気さくに話をする仲だ。

とある僧侶と話をしていた時の事、ふと自分が僧侶になった頃のことを思い出した。その僧侶とは年は違えども、お互いに新米の住職とあって顔を合わせれば現況報告

その日は、急に相手の僧侶が「分からないことがあっても、誰も何も教えてくれない。初めてのことがばかりなのに、どうするのか誰も何も言ってくれない。知らないことなのに、出来ない」と叱られる」と口を開いて始まった。要は現状に対する不満であるが、「とにかく何でも聞いたらいいいじゃない」という私の意見は上の空で、「大変、大変」と繰り返す。堂々巡りとはこの事であるが、そこでふと私が僧侶の世界に入った頃のことを思い出して告げてみた。私にも同様の経験があり、似た様な思いを抱いたことがあったからである。

私は一般的なサラリーマンの家庭で生まれ育ったごく平凡な人間で、所謂在家から出家して僧侶となった身である。生家の宗旨も、私が現在僧侶として身を置く宗旨ではない。幼い記憶を辿っても、佛壇の前に座ったことを思い出すのが難しいほど信仰から遠ざかった生活をしてきた。そのような私がなぜ僧侶に……という話は省くが、一般人の私が抱いていた勝手なイメージを悉く覆してくれたのが僧侶生活の幕開けだった。

僧侶というと専門的な機関、総本山や大本山と呼ばれる場所があって、そこで修行をして認可されると思われる方も多いだろう。大方その通りであるのだが、目新しい学校にでも通う感覚で胸を膨らませながら寺院に入ってきた私は、教えを授かること、日常の立ち居振る舞いを指導されること、謂わば僧侶の手解きを待ちながら日々の生活を送っていた。しかし、一向に待ち望んだ時限はやってこず、寧ろ叱咤激励ばかりされていた。とはいえず、無知蒙昧で分からないことが分からない段階の私には、何をどう勤め励んでよいか見当がつかず、途方に暮れるようになっていった。

断っておくが、これは寺院への批判ではない。そもそも心構えに問題があったという話だ。

私が知る僧侶の世界は、何も出来ない、知らない者に対して手取り足取り懇切丁寧に教え、出来れば褒め、出来なければ出来るまで何度でも親切に創意工夫して導いてあげる、といった世界ではない。手取り足取り教えられることなんて一回でもあればいい方で、基本は見学、その場で覚えていかなければならない世界である。

なぜなら、僧侶は寺院にとってお客様ではなく、佛教の実践者であり、体現者であり、伝道者であるからである。義務教育の様に受動的な学校でもなく、あくまで能動的な実践の場、修行をする場所であって、口を開け、黙っていて教えが降り注いでくる所ではない。

私はこのことに気付くまで長い時間を要した。それまでは不平不満の塊であったと思う。

なお、冒頭の僧侶にこの話をした所、すぐに分かってくれた。やはり素直が一番だな、と、こちらまで心が清らかになった次第である。

やっさん